『東亜同文書院大旅行誌』全33巻 オンデマンド版今ここに蘇る！

豊橋図書館　成　瀬　さよ子

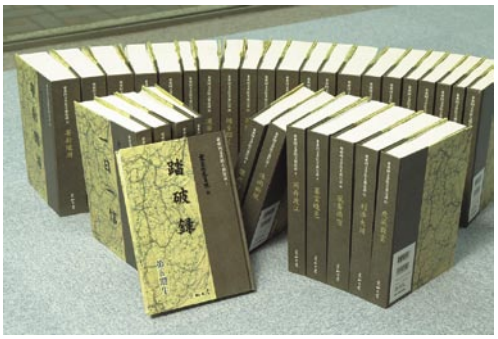
愛知大学創立60周年記念事業として復刻出版された『東亜同文書院大旅行誌』は、戦前の上海に在った東亜同文書院の学生達が、毎年中国大陸を大旅行した際に記録した日誌・紀行文をまとめて、各期生ごとに単行本として出版したものの総称である。

第五期生から第四十期生にわたる『大旅行誌』は、1907年から1942年にかけて混乱期の中国の実情を知る大変貴重な記録といえる。漢文調で旧仮名使い、見たことも無い難しい漢字や中国の地名に苦慮するが、今回原本を拡大して復刻したことで、多少読みやすくなったと思っている。

よく質問されるのが、「全体で33巻もあり、あまりに大部であるためどこから読めばよいのか分からずに尻込みをしてしまう。どの巻のどの班が面白かったのか、どんなことが記載してあるのか少しでも教えてほしい」と言われる。全巻を読みこなしていない私が書くのもおこがましいが、これまで読んで面白かったところを書き溜めた何点かを紹介することによって多少なりとも読んでみようかな？と興味をもたれればと思い、記すこととした。

第5巻『弧帆雙蹄』：第九期生の「漢中隊」p. 385− は、学術的な興味を引く記録がある。

漢陽の革命軍本部に学生たちが立ち寄ったときには、なんと辛亥革命の最中であった。一時は捕らわれの身となるが、革命に対して意見を求められ、また革命の主義を述べて、「諸君も革命に賛成して、日本でも吹聴してください」と言われている。黄興が、武昌に入り、漢陽総司令官の拝大将式があり、黎元洪は司令刀を黄興に渡し…。学生たちは、後からそれが辛亥革命（1911年）であった



ことを知るのである。東亜同文書院記念センターに写真資料があるので見ていただきたいが、孫文を支えた黄興や、軍閥の親分である黎元洪という歴史上の有名人物たちに学生たちが出会っていることに感激した。

第14巻『虎穴龍頷』：第十九期生「青海行」p. 1− は、当時の様子がよく記されている。

陝西督軍争奪戦で、荒らされて人は着るに衣なく、食うに糧なく寝るに布団なきの惨状、全く見るに忍びない。また、青海では、石原莞爾らと同宿となり、夕食を共にし青海の羊毛、甘粛の羊毛について親切な説明を聞いている。…邠州は、三原西安に通ずるシルクロードの分岐点で、今は住民は多くないこの田舎町に福音堂があり、白人宣教師が二人も頑張っているのに驚いた。…深夜に土匪の威嚇銃声を何度も聞いた。町には天主教の教会、信者200人余り、新教派の教会には2000人の信者、病院もあり商店にはライオン歯磨き、縫針、仁丹が並んでいた。青海の大草原で案内人とはぐれ、方向を見失い、飢えと寒さで死を予感したとき、馬麒将軍配下に助けられ人の温情に涙を流している。顔にバターを塗った蛮人の顔色が黒々と光っていたのは、青海の湖水には塩分が高いため日焼け防止だと判った。また馬麒将軍の朝

宗の礼（天子に諸侯がお目にかかる儀式）にも学生たちは立ち会っている。

第15巻『金聲玉振』：第二十期生「興安の月に騎して」p. 311－ 学生たちの様子が面白い。

興安嶺では、6名の馬勇（馬術に長けた警察官）に守られて行けば、途中で食料は何とかなると思い少ししか持っていかなかった。多倫を出発して2日目、行けども行けども人家がない。食料がない。馬勇たちは、焼餅をかじりながら進んでいる。馬勇さん情けあるなら1つ下さいと言いたいが、俺も日本人だ。武士は食わねど高楊枝の心境で我慢。飲まず食わずで食べたひえの団子のうまかったこと。…途中の民家で昼食、女主人がひえの団子やえんどう豆の煮物を出してくれた…そのうちにぞろぞろ人が集まってきて、眼を腫らした若人が眼を治してくれと言われ、大学目薬を点眼して一瓶あげた。次に男の子のお通じが出ないのでお医者様見てやってくれと言われ、得意になって口をアーンとあけさせ勿体ぶって虫下しを一服呑ませた。巡査が風邪で寝ている母親が血を吐いたので薬をと言われ、肺病と考えアスピリンを3服処方、最後に生まれて3ヶ月ぐらいの赤ん坊を抱いた母親が乳を飲まないので、助けてくれと嘆願した。赤ん坊に大人の薬は飲ませないとほうほうの体で退散した。

同15巻の「秦山蜀江」p. 143－ では、さすが東亜同文書院の学生は志が違うと感心した。

成都では、フランス人をトップとして英米人の宣教師が巾を利かせていた。一人は60歳ぐらいのカナダ人ギルホーン氏、宣教師として成都に30年以上住んでいる。医術を施して人望を得、立派な病院、広大な教会を持っていた。もう一人は、アメリカ人のカンライト氏医師兼宣教師で、在住25年で3階建ての大病院を経営。住民は、漢方医から安い西洋医にかかるようになった。日本を考えたとき、本気で徹底的に中国を研究しているものが果たして何人いるか。中国にいる日本の商人、官吏、宗教家たちは、目先の考えで行動しており、彼ら西洋人のように定着して中国人の中に入っていくという考え方は皆無ではなかろうか？ 日本における中国関係の研究者は、否応無しに我々でなければならない。東亜同文書院に籍を有する我々が第一線に立ってその旗を掲げなければ果たして誰ができるのか。成都でこのことを痛感した。

第16巻『彩雲光霞』：第二十一期生「匪徒に遇ふて」p. 1－ では、当時の混乱した世情が分かる。学生の度胸に驚かされるが、誰一人殺されなかったことは、特記に値する。

貴州省北部の都市遵義で、辺りはトウギビ畑の人影も無い淋しいところ、二人の担ぎやを先頭に4人（の学生）が続いた。突然銃口を向けられ頭目が、「こいつらは、外国人だ。品物はいらぬ、武器と食料がほしい」と言った。槍、太刀を持った部下が震えながら近づいてくる。銀3百元、メガネ、水筒、上着、写真もフィルムも剥ぎ取られた。手も後手に縛られた。人質と思っていたが、農家の入り口に来ると土匪たちは、一目散に山の方に逃げ出した。銃口を突きつけられたときには、草をとっていた百姓たちはもういない。…2度目の土匪に襲われる。武器はピストル、鶴田が持っていた銭を全て渡した。土匪が立ち去るとき可哀相に思ったか五十銭くれるという。頭にきたので、不要と叫んだ。…途中で知事に会い銀四元を旅費にもらい、元土匪の頭目に護送を頼んでくれた。途中では、宿泊代も食事代も不要だった。…3度目の土匪に襲われた。こちらは慣れて平気である。ご苦労さんと声をかけて、荷物を開けた。破れた油紙に包んだ日記を見せたら、通ってよい。…

いかがでしたか？ ほんの一部の紹介ですが、興味をもたれた方は、ぜひオンデマンド版をお読みください。また私が作成した『大旅行誌』全巻の検索ツールがお役に立てれば嬉しいです。

hegel.aichi-u.ac.jp/tools/toa/index.html